

10 . 恐れぬ王女 (ミンダナオ)

昔々、族長マノボという人がいました。彼にはインブガン王女という美しい娘がいて、彼女の美しさは、息を呑むようなものなので、湖や山のハンサムな神々は、彼女の好意を競い合って、彼女と結婚したいと考えていました。しかし、彼女の父は娘を大変愛していたので、彼はどんな求婚者にも、彼女の手を与えたくなかったのです。彼には彼女を家から出すという考えには、耐えられなかったのです。

ハンサムな山の神アポは、インブガンを大変愛していて、族長マノボが、彼と美しい娘が結婚することを許さず、断った時に、怒ってしまいました。歳の収穫が終わったあと、族長マノボが、山の神アポに大きなゴング(フィリピンでお祭りなどに用いられる鐘の一種)を捧げる義務は、大昔からの習慣になっていました。神はインブガンと結婚することを認められず怒っていたので、彼は族長である父に、普段より七日早くゴングを届けるように命じました。もしゴングが期限に届かなければ、山の神アポの手によって、恐ろしい運命を族長マノボと彼の民が経験することになります。

不安な族長は、助言者会議を招集して、いかにして期限までに大きなゴングを作ることができるかを話し合いました。ゴングの製作はすぐに始まりました。巨大な炉が作られ、その上には大きな鍋がかけられました。彼らの頭の上の高さに置かれた鍋の中に、村人は、金属のガラクタや鍋やフライパンを投げ入れました。族長と助言者の会議は、火が激しく燃えて、鍋の中で金属が溶けるように、燃え立つ火の周りで賛美したり、祈ったりしました。金属がいったん沸騰するような液体になると、それは鍋から流れ出て、巨大なゴングの形をした粘土の鋳型に流れ込みました。その大きさは、直径が男二人分ありました。

金属が入り、ゴングは鋳型から出され、族長は大きな棒で、その金属を叩きました。しかし、彼がぞっとしたことには、ゴングは音を出さなかつフィリピンの神話と伝説

たのです。彼らはもう一度、初めからゴングを作り直さなければなりませんでした。

しかし、第二のゴングは、第一のものと同じく、悲惨なものでした。今回は村人が粘土の鋳型から大きなゴングを出すと、一万もの小さなかけらに砕けました。時間は、ゴングの期限にまで進んで行きます。心配した族長は、まじない師を呼び、打つと美しい音を出して、こなごなに壊れない方法について、たずねました。

年取ったまじない師は、彼の目を閉じ、深い忘我状態に入って、ゴングの作り方を見つけるため、神々と交信しました。数時間後、まじない師は忘我状態からさめて、顔には心配の表情が見えました。族長が、まじない師に、神がどんな助言をしたのか、たずねると、まじない師は首を振り、体を震わせ始めました。彼が族長に言うには、彼には神々が彼に告げたことを繰り返すことはできない。いくら族長が何回も彼に問うても、まじない師は、体を震わせて、忘我状態の時に神々が彼に告げたことを明らかにすることを断ったのでした。

王女インブガンは、まじない師が体を震わせて忘我状態の間の、苦しい体験を語るのを恐れているのを見て、彼女は彼を隅の方に連れて行って、神が何を彼に告げたのか、話すように頼みました。それは父のため、そして部族のためだ、と言いながら。最初彼は躊躇しました。しかし、ついにまじない師は、秘密をインブガンに言うことに同意しました。そして彼女に、神が彼に告げた助言をつぶやきました。

インブガンは、父のところへ行って、彼女も次のゴングの鋳造の監督をすることを許可するように頼みました。なぜなら、彼女だけが完全な音楽の楽器の作り方の秘密を知っているからです。彼女の父は、すぐにインブガンに同意して、巨大な火をおこし、天に高く鍋をかけ、彼らは、何百もの、金属のガラクタや鍋やフライパンを投げ入れました。

溶けた金属が煮立った時、良い温度になったので、インブガンははしごをかけて、混じった状

態を見るために、鍋の頂上に登らせるよう頼みました。インブンガンがはしごのてっぺんに登った時、彼女はちょっと止まって、下に居る父を見ました。「愛していますよ。お父さん。」彼女はつぶやきました。そして、そのあと、みんなは恐ろしさに震えました。インブンガンははしごから飛び降りて、溶けた鉄の沸騰している中へ入って行ったのです。彼女はすぐに炎に呑み尽くされました。彼女の父と他の村人は、狼狽して、泣き叫びました。しかし、美しいインブンガンを助けることは誰にもできなかったのです。

深い悲しみに打ちのめされた族長は、手を頭にうずめて、ひざまずきました。まじない師は、彼の所へ来て、彼の肩に手を置いて慰めました。「悲しんではならない。」と、まじない師は言いました。「神は私に、ゴングのために、完全にちょうごうされたものを作る唯一の方法は、美しい王女の肉と血を加えることだ。その時、適切な温度になる。あなたの娘は、自分の命をあなたや、あなたの民に犠牲として捧げたのです。」

新しいゴングが粘土の鋳型から取り出されると、村の人たちが今まで作った中で、最も強く、最も美しいものでした。族長が大きな棒で、新しいゴングを叩くと、その甘い音は、すべての人が聞けるように、土地全体にこだましました。族長は娘を失ったことで深い悲しみの中にありました。しかしまた、彼女が命を犠牲にして、この地の一番美しい音楽の楽器を生み出したことを誇りにしたのです。

美しいゴングは、山の神アボが与えた期限内に彼に捧げられました。彼は美しいゴングを叩いた時、美しい音がするのに驚きました。しかし、美しいインブンガン王女のことを聞いた時、彼は悲しくなりました。彼は、彼女のことを大変愛していたのですが、彼女はゴングを作るために、命を犠牲にしたのです。

彼の領地である、雲の上の高い所から、山の神アボは宣言しました。「このゴングは、私の愛した王女インブンガンの肉と血が含まれている。私はこの美しいゴングを美しい川に変えて、その流

フィリピンの神話と伝説 10 . 恐れぬ王女

域の土地に住む、すべての人を永遠に支える。同様に、あなた方は、常に、美しい王女インブンガンの勇気と犠牲を覚えなければならない。彼女が、あなた方の心に、永遠に生きるように。」

山の神アボは、美しいゴングを雲の上から下の土地に投げました。ゴングが地を叩くと、すぐに目がくらむように光が起こり、ゴングは溢れる川になり、太陽の下で、光り輝きました。

その日以来、インブンガン川として知られるようになったその川は、マノボの人々に豊かな魚を供給し、また移動の道として用いられ、彼らは美しい王女によってなされた究極の犠牲を忘れることはありません。